

コロナ禍での全学連大会の開催について

2020年8月29日

今次第81回全学連大会は、コロナ・パンデミックという、人類史においても大きな意味を持つことになる情勢のなかで開催された。

マスクやアルコールの準備はもちろん、体温測定、発言台前のビニール幕の準備、発言者が変わるたびのマイクの消毒など多岐にわたる防疫対策をし、基礎疾患や濃厚接触の疑いのある仲間は特例としてオンラインで参加する体制をとった。

私たちは本来、今だからこそ、学生はオンラインを広い窓口としながらも、オフラインでの交流をもっと増やすべきだと考えている。オンラインに限らない話ではあるが、ネット上での言説に特有なように、どこまでいっても意見は意見でしかなく、ある意見の「実行」は結局のところ既存の統治機構に任されてしまう。実際に、コロナ対策であったはずの大学のオンライン化は、政府諮問会議のひとつ「国立大学法人の戦略的経営に向けた検討会議」において位置付けられているとおり、大学キャンパスから学生を追い出し、新たな「マスプロ教育」の方法として、学生を資本にとって都合の良い商品にしようとしている。

「コロナ対策」だと多くの学生が思っていたこととまったく違うことが実行されているのだ。コロナへの不安が社会全体を覆っているなか、「ウィズコロナ」などといわれて経済再開が強行され、小中高校も再開しているなか、いまだ大学だけが再開されていないかのようだが、実はまったく別のものとして大学は「再開」されているのである。

このような状況は逆に、オンラインに置き換えられないものの価値を再発見する契機にもなっている。「エッセンシャルワーカー」という言葉は、限定的ではあるが人間労働の意義に多くの人が目を向けざるをえなかったことを示している。

全学連は、学生同士の交流と団結に根差す学生自治というあり方がいかに意義のあるものか、ずっと訴え、その再建を目指してきた。学生自治は、その理念として「意見を言う人」「責任をとる人」のような分断を固定化せず、常に一人ひとりの学生自身が自らが生きる場・社会の主人公であることを目指すものである。この理念を実現していくためには、顔をつき合わせた議論ができる関係、それを保障する空間が絶対に必要である。

そうやって意志を固め行動していくことができないうちに、私たちは日常の矛盾が積み重なって訪れる、大きな危機のときに理不尽な目に逢ってとまどってしまう。コロナ禍において焦点があたった、大学の学費の高騰の問題は、学生自治が破壊され、問題を問題として告発する力が学生から奪われてきたことに主体的な原因がある。この状況をひっくり返さないかぎり、同じようなことはまた何度でも起こるだろうし、起きているだろう。

全学連は、コロナ感染のリスクがあることを覚悟し、仮にクラスターの発生源となってしまったとしても、全学連大会は決して「不要不急」のものなどではなく、やるべき集まりであったと固く信じる。

全日本学生自治会総連合